



Book Review

上手に食べるために 2 摂食指導で出会った子どもたち

田村文誉 著

食べるという行為がづらいという状態は、健康に恵まれた人にはおよそ理解できないであろう。しかし摂食嚥下機能障害を有する小児にとっては、食べるのがつらいのである。そのため摂食嚥下リハビリテーションが行われる。長く小児の摂食嚥下リハビリに取り組みられている日本歯科大学口腔介護・リハビリテーションセンター准教授、田村文誉先生が新著を刊行された。ここに喜びをもって読者諸兄姉にご紹介申し上げる。

本書は『上手に食べるために—発達を理解した支援—』(金子芳洋・菊谷武監修, 2005年, 医歯薬出版刊)の続編である。この前著では、まず乳幼児の正常な摂食嚥下機能の発達を解説、次に機能障害に対してバンゲード法を中心にリハビリの方法を解説、さらに添付のCDによるビジュアルな解説も行われ、読者から高い支持を得た。

続編である本書は、1ページまたは見開き2ページで1項目とし、全4章49項目から成立している。1項目=1課題で、具体的な課題とその解決策を提示し、読者の理解を促進している。紙面のレイアウトやイラストも適切で、視覚的に読者の目に入りやすく、読みやすい、分かりやすいできあがりである。

本書の構成は以下の通りであ

る。

1章 こんなことに悩んでいます！

2章 どうしたらよいでしょう？

3章 摂食指導と摂食機能訓練

4章 摂食機能の基本的知識

1章は25項目、2章は15項目から成り、臨床の場で毎日接するであろう課題を取り上げ、明快に解決策を提示している。具体的には、摂食嚥下リハビリテーションを始める時期、気管切開時の摂食、チューブ栄養から経口摂取への移行、ミルクから食事への移行、自食が進まない、体重増加が芳しくない、摂食嚥下機能と言語機能との関係、知的障害児の早食い(咀嚼せずに丸飲みする)、などの課題である。全課題が小児の発達神経学的視点から検討されており、筆者のような分野の者にはありがたい課題選択である。

3章は4項目、4章は5項目から成り、この2章は前著を補完する内容である。

本書はどのような読者を想定しているのだろうか？ 歯科医師？ 小児科やリハビリ科の医師？ 歯科衛生士、作業療法士、言語聴覚士、栄養士などのコメディカル？ 障害児をもつご家族や障害児教育の関係者？ いや、これらすべての方々にお勧めできるというのが筆者の読



B5判, 100頁
定価 3,150円
(本体 3,000円+税 5%)
医歯薬出版刊

後感である。どなたが読まれても、有用かつ理解しやすい一冊であると太鼓判を押せる。

筆者の好きな言葉に、「やさしい課題を難しく解説するのはやさしい、難しい課題をやさしく解説するのは難しい」という、禅問答のような、しかし真実をついた言葉がある。本書は難しい内容をやさしく解説するという難作業を、読者に作業の苦勞を感じさせずに(実際は苦勞をされたであろうが)やってのけた。著者田村文誉先生と編集部との連携プレーに、感謝と敬意とをささげる。

(2009年復活祭のころ記す)

鈴木文晴
(東京都立東大和療育センター
副院長・小児神経科)